

芦屋大学論叢 第75号
(令和3年7月27日)抜刷

《研究ノート》

教員養成課程の学生における
体育授業観の変容に関する考察

—模擬授業とその省察を中心とした教科教育法の授業前後に着目して—

石 川 峻
川 口 諒

《研究ノート》

教員養成課程の学生における体育授業観の変容に関する考察

— 模擬授業とその省察を中心とした教科教育法の授業前後に着目して —

石 川 峻
川 口 諒

1. 緒言

新たな知識や技術の活用により社会の進歩や変化のスピードが速まる中、教員の資質能力向上は我が国の最重要課題であり、世界の潮流でもある（中央教育審議会，2015）。また、「教師は授業で勝負する」と言われるように、教育の専門家としての確かな力量が求められている（中央教育審議会，2005）。吉崎（1997）は、教師の授業力量を信念、知識、技術の3つの側面からとらえている。その中で「信念」は、授業づくりや授業実践に方向づけをあたえるものであるとされており、この「信念」とは授業観、教材観、指導観、子ども観といった教師が授業に関して持っている「ねがい」である（吉崎，1997）。朝倉（2016）は、体育教師としての信念が最も典型的に表れるものとして、職務の中心である授業に対する信念、つまり授業観であると指摘している。

体育科教育学の分野においては、教員養成段階の学生を対象とした研究が多く報告されている。例えば、勝亦・高橋（1979）は教育実習前後での授業観の変容を検討しており、その変容から実習期間中に、よい授業を創り出すための問題点が鮮明になってきた傾向を示す、一つのあらわれではないかと推測できると報告している。嘉数（2012）は、教員養成段階の学生の体育授業観を明らかにするために、体育授業観についての尺度を作成し、学年間の差異を検討している。そこでは、学生が保持する体育授業観が「生徒を動機づける授業」「雰囲気の良い授業」「理想的な授業」の3つの因子から構成されることを明らかにしている。そして、これらの各因子について各学年間での差異はないが、保持している授業観が強化される傾向にあると指摘している。これらの研究は質問紙を用いて学生が保持する体育授業観を数量的に把握しようと試みたものである。

一方で、近年では学生が保持する体育授業観について記述形式で回答を得て、その記述から体育授業観の構造を質的に明らかにしようと試みている研究が見られる。例えば、嘉数・岩田（2013）は教育実習を経験することで体育授業観がどのように変容するのかを検討している。その結果、教育実習前後において実習生が「目指す体育授業」として示す授業観は、「体育授業において身につけさせたいこと」「体育授業における生徒たちの雰囲気」「体育授業の実践」の3つに大別され、教育実習前後では、実習生の授業観の категорияに変化があることが示されたことを報告している。また、住本（2016）は、小学校教員養成課程の学生が保持する体育授業観の様態を検討した。体育授業観としては、大きく3つの考えに分けることができ、「体育授業の日標に関すること」「体育授業の情意面に関すること」「体育授業の安全面に関すること」であったと報告している。

さらに、嘉数・江藤（2014）や江藤（2019）は、教育実習前の教科教育法の授業の前後で体育授業につ

いての授業観や指導観の様態がどのように変容するかについて検討している。嘉数・江藤（2014）による報告では、授業前後で学生が保持している体育授業観に変容が見られなかったものの、一部の下位カテゴリーでは授業後に記述数が増えているものもあり、指導案の作成や模擬授業といった実践色の強い授業内容が影響していることを示唆している。また、江藤（2019）は、体育授業のとらえ方や考え方を体育の指導観とし、教科教育法の授業前後での変容について検討している。そして、下位カテゴリーの記述数に授業前後で変化があり、なぜ体育授業の指導観をそのように考えているのかという理由についての記述から、講義における学びが学生の保持する体育授業の指導観の変容に影響したことを報告している。

このように、教員養成段階における学生が保持している体育授業観が明らかにされており、教育実習や教科教育法の授業を経験することで変容することが報告されている。さらに、嘉数・江藤（2014）が指摘しているように、模擬授業のような実践的な経験を伴う学習を行うことによって、学生が保持する体育授業観に変容が見られることが考えられる。

そこで本研究では、教育実習前の教科教育法の授業において、学生により多くの実践の機会を保障し、模擬授業とその省察を中心とした教科教育法の授業の受講前後で、学生が保持する体育授業観がどのように変容するのかを明らかにすることを目的とする。これらを明らかにすることは、授業改善や教員養成のカリキュラムを検討する上での有益な知見を得られると考える。

2. 研究方法

2.1 研究対象

対象者は、A大学において2020年度後期に開講された「中等教科教育法Ⅱ（保健体育）」を受講した21名である。この授業は2年生を対象とした講義であるが、3、4年生も数名受講していた。授業のスケジュールは表1に示している。この授業の担当は筆者のうちの1名であった。

A大学では保健体育科の教科教育法の授業として、中等教科教育法Ⅰ（保健体育）～中等教科教育法Ⅳ（保健体育）まであり、原則、中等教科教育法Ⅰ（保健体育）から順番に履修していく必要がある。中等教科教育法Ⅰ（保健体育）では主に保健体育科の目標や内容について学習している。

中等教科教育法Ⅱ（保健体育）では最初の4回で体育授業運営に関する知識の習得を目指し、座学形式で授業を行った。その後は模擬授業とその省察を中心に授業を進めた。第7回の授業については、新型コロナウイルス感染症の影響で、急遽、レポート課題に授業を振り替えた。

模擬授業に関しては、6グループに分け、1グループずつ教師役として模擬授業Ⅰと模擬授業Ⅱを実施した。指導案の作成や授業の準備はグループ全員で協力して行うが、必ずメインで指導や説明を行う部分を設定することを条件にした。模擬授業Ⅰでは、1グループ20分の模擬授業を実施後、協議会を15分程度実施した。そして、指導者役グループが交代し、新たに1回目と同様の流れで模擬授業と協議会を実施した。模擬授業Ⅱでは、模擬授業Ⅰの反省を生かして授業内容を修正し、同じグループが同じ単元で40分の模擬授業を実施した。その後30分程度の協議会を実施した。なお、対象者のほとんどが模擬授業を行うのは初めてであった。

対象者には研究の趣旨と本研究への参加の有無等が授業の成績には一切関係しないことを口頭と書面にて説明した。また、一度研究への参加に同意した後でも、いつでも研究への参加を中止できることも伝えた。その上で、書面での同意書の提出をもって、研究参加の同意を得た。

表1 授業のスケジュール

回	日付	授業内容	
1	10/2	講義①	ガイダンス
2	10/9	講義②	体育授業の構造, 指導案の書き方
3	10/16	講義③	教材, 教具
4	10/23	講義④	教師行動
5	10/30	模擬授業Ⅰ①	バレーボール (グループ 1, 2)
6	11/6	模擬授業Ⅰ②	マット運動 (グループ 3, 4)
7	11/13	レポート課題	指導案提出
8	11/20	模擬授業Ⅰ③	バスケットボール (グループ 5, 6)
9	11/27	模擬授業Ⅱ①	バレーボール (グループ 1)
10	12/4	模擬授業Ⅱ②	バレーボール (グループ 2)
11	12/11	模擬授業Ⅱ③	マット運動 (グループ 3)
12	12/18	模擬授業Ⅱ④	マット運動 (グループ 4)
13	1/8	模擬授業Ⅱ⑤	バスケットボール (グループ 5)
14	1/15	模擬授業Ⅱ⑥	バスケットボール (グループ 6)
15	1/22	講義⑤	まとめ

2.2 調査内容と調査方法

教科教育法の授業前後での体育授業観についての変容を調査するために、第1回の授業において、「『よい体育授業』とはどのような授業だと思うか」について自由記述させた（以下、授業前）。そして、第15回の授業において、再度「『よい体育授業』とはどのような授業だと思うか」について自由記述させた（以下、授業後）。またその後、第1回のレポートを返却し、授業前と授業後の記述を見比べ、記述が変化し、もしくは変化しなかった理由やきっかけについて記述させた。また、得られた結果の解釈や考察の際の補助資料として、学生が模擬授業後に記述したリフレクションシートも収集した。

2.3 分析の手続き

提出された授業前後のそれぞれのレポートの記述を分析対象とした。提出がなかったもの、記述に不備があったものを除き、最終的に19名のレポートが分析対象となった。記述の分析は結果の内的妥当性を高めるために、筆頭執筆者と体育科教育学、教師教育学を専門とする大学教員である共同執筆者の2名で行った。

分析においては、まず2名それぞれが記述された内容を意味の通る一文を一区切りとした。区切り方が一致しなかった記述については、2名で協議しながら区切った。その結果、受講前32個、受講後47個の記述が分析対象となった。その後、KJ法（川喜田，1970）を参考にして帰納的に分類した。カテゴリーの分類と命名は、2名で協議しながら行った。

3. 結果と考察

3.1 教科教育法の授業前後における授業観の様相

表2は教科教育法の授業前後における体育授業観のカテゴリー分類とその記述数、割合を示したものである。学生の「よい体育授業」として示された体育授業観は、「授業の目標」と「授業の実践」の大きく2つのカテゴリーに分けられた。

1つ目の上位カテゴリーである「授業の目標」は「知識・技能が形成される授業」、「情意的態度が形成される授業」、「社会的態度が形成される授業」の3つから構成されている。授業前の記述の約8割がこの「授業の目標」に関する内容であった。本研究と同じく2年生を対象に、教科教育法の授業前後での体育授業観を調査した嘉数・江藤（2014）の研究でも、授業前に「授業の目標」に関する記述が6割と多くを占めていた。したがって、保健体育教師を目指す学生が初期段階で獲得している授業観であると考えられる。

「授業の目標」の下位カテゴリーである「知識・技能が形成される授業」は「正しい知識を身につけることのできる授業」や「基本的な技能が身につけられる授業」などから構成されている。生徒に体育で取り扱われる各単元、種目の知識や技能を身につけさせてあげたいという考えである。

「情意的態度が形成される授業」は「生徒の興味・関心を引き出せる授業」、「生徒が意欲的に取り組む授業」、「楽しさのある授業」から構成されている。特に「全員が」や「運動が苦手な生徒も」という記述が目立った。これは嘉数・岩田（2013）や住本（2016）の研究と同様の傾向であった。「運動習慣の二極化」（スポーツ庁、2018）や「体力の二極化」が嘆かれている今日で、運動が得意な生徒や、一部の生徒だけが楽しむのだけではなく、体育の授業の中では全員が一緒になって運動を積極的にに行い楽しんでもらいたいという考えである。自分たちの活動に対して笑いや歓声、喜びの表現といった「情緒的開放」の行動をみせることができる学習集団の存在も、よい体育授業には欠かせない（細越、2021）。したがって、学生はこれまでの経験からすでに重要な授業観を保持していることが明らかになった。

「社会的態度が形成される授業」は「生徒同士が協力できる授業」や「人間関係の向上が図れる授業」から構成されている。肯定的な人間関係は日常の学校生活で形成されるが、仲間と関わりながら活動する場面の多い体育授業では、意図的に学習者が関わり、集団的達成をすることで、互いの関係を肯定的にしていく契機を積極的につくることのできる（細越、2021）。さらに、より肯定的な人間関係の構築を促進できる体育授業は、教室や学校生活に人間関係の向上に波及効果をもつと同時に、その肯定的な人間関係が、さらに良質な体育授業へと相互に結びついていくことが期待される（細越、2021）。また、授業の中で子ども同士が肯定的に、しかも頻繁に関わり合っている姿がみられる場合、授業の雰囲気は実に明るく、また大きな学習成果を予想させる（米村ほか、2003）。そして、それは教師のそれ以上に強く学習成果に影響するものと考えられる（米村ほか、2004）。以上のことから、仲間との協調生や仲間同士でのアドバイスといった社会的態度を身につけさせたいという授業観も重要であり、すでに保持している学生も存在することが明らかになった。

2つ目の上位カテゴリーである「授業の実践」は「分かりやすい授業」、「マネジメントされた授業」、「雰囲気のよい授業」の3つから構成されている。「授業の実践」に関する記述は授業後に多く出現した。

「分かりやすい授業」は「授業の目標が明確な授業」、「生徒の実態に応じた指導がなされる授業」から構成されている。目標がフラフラと安定せず、ぼんやりとしたものだと、どんな学習活動を設定しても、どんな指導を工夫しても、それが適切なのかどうか判断できない（市川、2019）。どのような授業の展開であっても、生徒一人ひとりが自分の学習の目標を明確に意識できているかが最も重要になる（細越、2021）。

表2 体育授業観のカテゴリーと記述数

カテゴリーⅣ	カテゴリーⅢ	カテゴリーⅡ	カテゴリーⅠ	受講前（第1回）			受講後（第15回）				
				I	Ⅱ、Ⅲ	Ⅳ	I	Ⅱ、Ⅲ	Ⅳ		
授業の目標	知識・技能が形成される授業		正しい知識を身につけることのできる授業	0	1		1	3			
			基本的な技能が身につけられる授業	0			1				
			楽しみながら技能を身につけられる授業	1			1				
	情意的態度が形成される授業	生徒の興味・関心を引き出せる授業		スポーツに関心を持つきっかけとなる授業	0	3		1	2		
				運動習慣のきっかけになる授業	1			1			
				生徒の興味をひく授業	1			0			
				生徒のやる気を引き出せる授業	1			0			
		生徒が意欲的に取り組む授業			生徒が積極的に取り組む授業	1	6		2	10	
					生徒全員が積極的に取り組む授業	3			2		
					生徒が主体的に取り組む授業	2			2		
					生徒が前向きに取り組む授業	0			2		
		楽しさのある授業			生徒が挑戦できる授業	0	10		2	4	
					生徒全員が楽しめる授業	2			0		
					運動が苦手な生徒も楽しめる授業	4			1		
					運動が得意な生徒も苦手な生徒も楽しめる授業	3			3		
	社会的態度が形成される授業	生徒同士が協力できる授業		運動が苦手な生徒でも参加できる授業	1	5		0	3		
				生徒同士で教え合うことのできる授業	1			2			
				生徒同士が協力する授業	0			1			
				仲間との協力する態度を学ぶ授業	1			0			
				協調性が育まれる授業	1			0			
			人間関係の向上が図れる授業	1			0				
			相手を尊重する態度を学ぶ授業	1			0				
授業の実践	分かりやすい授業		授業の目標が明確な授業	0	1		3	8			
			教具を活用したわかりやすい授業	0			1				
			教師が手本を見せられる授業	1			1				
			生徒の実態に応じた指導がなされる授業	0			3				
	マネジメントされた授業			生徒の活動時間が長い授業	0	1		1	11		
				安全面に配慮した授業	0			10			
				メリハリのある授業	1			0			
	雰囲気の良い授業	コミュニケーションが取れている授業		教師と生徒が一体となる授業	2	5		4	6		
				教師と生徒が協力して作り上げる授業	1			0			
				教師と生徒の関わりのある授業	1			0			
明るい雰囲気のある授業				1	1						
			教師が生徒の憧れとなるような授業	0			1				
合計				32			47				

また、学習指導要領（文部科学省，2017）においても、内容の取扱いにおける配慮事項として、「個に応じた指導の充実」が挙げられている。学生たちは、模擬授業の経験から目標を明確にすること、生徒の実態に応じた指導の必要性を実感したと考えられる。

「マネジメントされた授業」は「安全面に配慮した授業」や「生徒の活動時間が長い授業」から構成されている。「安全面に配慮した授業」はすべて授業後に出現した記述である。安全面に関する授業観はグラウンドや体育館で実際に体を動かし、運動するといった教科である体育科特有の授業観として解釈できる（住本，2016）。体育の模擬授業を経験したことで獲得した授業観であると考えられる。

「雰囲気の良い授業」は「コミュニケーションが取れている授業」や「明るい雰囲気のある授業」から構成されている。教師が一方的に知識、技能を伝達するだけでなく、生徒との相互作用を大切にしていきたいとい

う考えである。多くの「授業の実践」に関する記述は授業後に出現したのに対して、このカテゴリーの記述は授業前から一定数みられたのが特徴である。

3.2 教科教育法の受講後における体育授業観の変容

全体的な記述数の変化をみてみると、授業前は32個の記述だったのが、授業後は47個に増加した。次にカテゴリーごとの記述数をみてみると、授業前では「授業の目標」が25個(78.1%)、「授業の実践」が7個(21.9%)であったのが、授業後は「授業の目標」が22個(46.8%)、「授業の実践」が25個(53.2%)となっている。「授業の目標」に関する記述数に大きな変化はないが、「授業の実践」に関する記述が大幅に増加し、割合が大きく変容した。次に、授業前後で変容の大きかった項目についてみていくこととする。

3.2.1 安全面に配慮した授業

授業前では記述がみられなかった「体育授業の安全面」が、授業後では10個であった。西野ほか(2017)は、学校現場における「よい体育授業」について、自由記述を学年間で比較した結果、「安全面」に関しては、3年生は1年生と大きく異なり、多く記述していることを報告している。3年生は、半年後に控えた教育実習を見据えて、安全面を体育の授業を考える上では絶対的条件として挙げられたと考えられる(西野ほか, 2017)。実際の学校現場においては、日本スポーツ振興センター学校安全部(2021)の「学校の管理下の災害」によると、教科別の負傷数で、小学校、中学校、高等学校のどの年代でも保健体育は他教科より圧倒的に多い。中学校学習指導要領(文部科学省, 2017)の体育分野の目標においても、「健康・安全に留意し、自己の最善を尽くして運動をする態度を養う」ことが挙げられている。また、生徒に安全な学習環境を提供することは、すべての体育教師にとって大きな責務であり、計画の段階はもちろんのこと、授業実践の段階では、第一に安全が考慮されなければならない(シーデントップ, 1988)。したがって、体育授業での安全面は非常に重要であるといえ、この授業観を多くの学生が教科教育法の授業を通して獲得したことが明らかになった。

しかし、今回の授業では、マット運動の単元における模擬授業の中で、2人組での補助付きの倒立の練習の際に、振り上げた足が補助者の鼻に直撃し、鼻血が出て怪我をするといったアクシデントがあった。安全面の記述をしていた学生の中には、その模擬授業の授業者や怪我をさせた当事者が含まれている。下記は、そのうち1名の学生の授業後に記述した「よい体育授業」とその変容のきっかけについてのレポートの一部である。

自分の考える良い体育授業は、まず第一に安全に考慮されているかが大事だと思います。実際に模擬授業をやってみて、1回目の時には安全面に考慮しておらず、やってみると危ない場面などがでてきたので、その部分は1回目の模擬授業の際に大切だと感じました。

模擬授業以前は安全面よりもみんなが楽しく分かりやすい授業だったのですが、模擬授業を通して安全面の大切さを知り、優先順位が大きく変わりました。(学生A)

他の学生も、模擬授業で怪我をするアクシデントを目の当たりにして、安全面の授業観を獲得した可能性が考えられる。このようなアクシデントが模擬授業の中で発生したことは、担当教員として反省すべき点ではあるが、模擬授業の中で特に印象に残る出来事があると、既存の授業観が揺さぶられ、授業観の変容に強く影響するのではないかと考えられる。

3.2.2 生徒が意欲的に取り組む授業

生徒が積極的に、主体的に取り組む授業といった「生徒が意欲的に取り組む授業」に関する記述は受講前から一定数みられた。授業後は同じ「生徒が意欲的に取り組む授業」の 카테고리の中でも「生徒が前向きに取り組む授業」、「生徒が挑戦できる授業」といった記述がみられた。嘉数・江藤（2014）の研究でも、授業後に「ミスを恐れない雰囲気のある授業」が1個から4個に増加しており、先行研究と同様の傾向を示した。高橋（2010）は、子どもが評価する体育授業の特徴の1つとして、能力の低い子どもへの関わりや指導が多く、有能観をもたせる努力を払っていることを挙げている。岡沢ほか（1996）は、練習すれば、努力すればできるようになるという項目で構成されており、自己の努力や練習によって運動をどの程度コントロールできると認知しているかを示す運動有能観の因子を「統制感」と命名した。そして、体育授業において運動能力や運動技能の低い子どもの運動有能感を高めていくために、現在できない技術でも、努力や練習によってできるようになるという統制感は重要であると思われると述べている。

しかし、一般的に大学で行う模擬授業では、中学生や高校生を学習者として想定して授業を設計することが多いが、授業の目標となる課題設定が、これまでスポーツを継続的に行ってきた中等保健体育科コースの学生には易しい設定になることが多く散見される（石川・川口，2020）。そこで、たとえ模擬授業の中では、生徒役の学生が意欲的に取り組んでいるようにみえても、協議会等を活用し、「この内容でできない生徒、苦手な生徒が意欲的に取り組めるようにするには？」という視点を投げかけることで、このような授業観の獲得に繋がるのではないかと考えられる。実際に学生の授業のリフレクションシートをみると、「上手くいったが、これが中学生だったら…」といった記述もみられた。

3.2.3 分かりやすい授業

「目標が明確な授業」や「生徒の実態に応じた指導がなされる授業」といった「分かりやすい授業」に関する記述は、授業前が1個であったが、授業後は8個に増加した。高橋（2010）はよい体育授業のための内容的条件の1つとして「学習目標がはっきりしている」ことを挙げている。また、細越（2021）もよい体育授業を実現させるためには、その授業で何をを目指すのか、そのためには何を学ぶことが必要なのか、つまり学習の目標と内容を明らかにする必要があることを挙げている。したがって、学習目標が明確なことは、授業を行う上で、非常に大切であり、教科教育法の授業を通して獲得していることが明らかになった。

授業後に「分かりやすい授業」に関する授業観を獲得した学生2名の、授業観の変容のきっかけに関する記述をみると、どちらも指導案作成であった。

変化した1番大きな要因は、これまでの授業内で行ってきた「指導案作成」だと思います。自分が授業をする度に指導案を作り、その中で授業の事前に計画を立てる重要性を知りました。（学生B）

変化としては苦手な子にどう対応するのかを15回目の方がより具体的に書いていて、実際に指導案を作った時に、注意されて対応の仕方の部分を覚えたからだと思いました。（学生C）

このように、指導案作成は授業観の獲得の際の重要なポイントであり、教科教育法の担当教員は模擬授業をする前の入念な準備、計画を指導していくことが必要であると考えられる。

3.3 模擬授業とその省察を中心とした教科教育法の授業の意義

教員養成課程で行われる模擬授業は、学生が生徒役をするため、実際の授業で派生する事象と乖離していることから、その有効性を疑問視する声もある（三田部，2021）。しかし、インストラクション、相互作用行動を行うタイミングや教材内容を検討するといった学びがあること、教授技術について試行ができることから、

実践的指導力を高めることにつながる有効な指導方法の1つであることも事実である（三田部，2021）。

本研究では、「分かりやすい授業」や「マネジメントされた授業」等の「授業の実践」に関する記述が、授業前の7個（21.9%）から授業後は25個（53.2%）に増加した。学生の変容のきっかけをみると、先述した学生A、B、Cの他に下記のような記述がみられた。

変わったと思うところは、前回よりもどのような授業という具体的に詳しく書いているところだと思う。

この変化のきっかけは模擬授業だと思う。実際にやってみて感じるものがたくさんあった。（学生D）

私が前回書いたものは生徒側からのものだと思います。だけど実際に自分で授業をしたりすることによって、指導する側のものに変化したのだと思います。（学生E）

このように、学生は教科教育法の授業で指導案作成を含む複数回の模擬授業を経験したことで、これまで漠然と捉えていた体育授業のイメージがより具体的になったのではないかと考えられる。教員養成の初期段階の教科教育法の授業で模擬授業とその省察を行うことは、「授業の実践」に関する授業観の獲得につながることを示唆された。

4. まとめ

4.1 摘要

本研究では、教員養成の初期段階でどのような体育授業観を保持しているのか、模擬授業とその省察を中心とした教科教育法の授業前後で、体育授業観がどのように変容するのかを明らかにすることを目的とした。その結果、下記の3点が明らかになった。

- (1) 学生が保持している体育授業観は「授業の目標」と「授業の実践」の大きく2つのカテゴリーに分けられた。
- (2) 教科教育法の授業後は、「授業の実践」に関する授業観を多く獲得した。
- (3) 大きく変容がみられた授業観の項目は、「安全面に配慮した授業」、「生徒が意欲的に取り組む授業」、「分かりやすい授業」であった。

模擬授業とその省察を中心とした教科教育法の授業により、学生の体育授業観に変容がみられることが明らかになった。変容のきっかけは模擬授業を経験することはもちろんのこと、模擬授業を実施するまでの計画や準備、つまり指導案作成も重要なポイントであった。

4.2 今後の課題

これまでの研究では、学年間での授業観の差異（西野ほか，2017）や教育実習の前後による授業観の変容（嘉数・岩田，2013；勝亦・高橋，1979）もみられる。したがって、今後は今回の研究対象者に対して、上級生での教科教育法の授業や教育実習を通じた縦断的研究を試みることで、より教員養成段階の授業観の変容が明らかになり、教員養成のカリキュラムを検討する上での有益な知見を得られると考えられ、今後の課題としたい。

文献

- 1) 朝倉雅史 (2016) 体育教師の学びと成長：信念と経験の相互影響関係に関する実証研究. 学文社, pp.116-146.
- 2) 中央教育審議会 (2005) 新しい時代の義務教育を創造する (答申).
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo_0/toushin/1212703.htm (2021年3月26日閲覧).
- 3) 中央教育審議会 (2015) これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について：学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて (答申).
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo_0/toushin/1365665.htm (2021年3月26日閲覧).
- 4) ダリル・シーデントップ；高橋健夫ほか訳 (1988) 体育の教授技術. 大修館書店, pp.233-234.
- 5) 江藤真生子 (2019) 小学校体育授業の指導観の変容に関する事例研究：養成段階の学生を対象とした教科の指導法に関する講義に着目して. 日本教科教育学会誌, 42(3) : 83-94.
- 6) 細越淳二 (2021) よい体育授業の条件. 岡出美則・友添秀則・岩田靖編. 体育科教育法入門 三訂版. 大修館書店, pp.53-60.
- 7) 市川尚 (2019) 学習目標の設定. 稲垣忠編；教育の方法と技術：主体的・対話的で深い学びをつくるインストラクショナルデザイン. 北大路書房, pp.95-108.
- 8) 糸岡夕里 (2010) 体育授業で求められる教師の能力. 高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖編. 新版 体育科教育法入門. 大修館書店, pp.251-256.
- 9) 石川峻・川口諒・上田毅 (2020) 教員養成課程の模擬授業における学生のリフレクションに関する一考察：体育実技科目「バスケットボール」を対象として. 芦屋大学論叢第, 73 : 77-88.
- 10) 嘉数健悟 (2012) 体育教師志望学生の体育授業観に関する事例研究：因子構造と学年間の差異. 広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部, 61 : 291-297.
- 11) 嘉数健悟・岩田昌太郎 (2013) 教員養成段階における体育授業観の変容に関する研究：教育実習の前後に着目して. 体育科教育学研究, 29(1) : 35-47.
- 12) 嘉数健悟・江藤真生子 (2014) 体育教師志望学生の授業観の様態に関する研究：「教科の指導法に関する科目」の授業前後に着目して. 九州体育・スポーツ学研究, 28(2) : 1-11.
- 13) 勝亦紘一・高橋亮三 (1979) 教育実習に関する調査研究：体育科実習を通しての授業観の変容. 順天堂大学保健体育紀要, 22 : 16-27.
- 14) 川喜田二郎 (1970) 続・発想法：KJ法の展開と応用. 中央公論新社.
- 15) 松本奈緒 (2015) 複数回の指導経験から反省的実践力を保障する体育教師養成カリキュラムの検討：マイクロティーチングと模擬授業の実施・省察を通して. 秋田大学教育文化学部研究紀要 教育科学部門, 70 : 33-43.
- 16) 三田部勇 (2021) 模擬授業の意義と効果的な進め方. 岡出美則・友添秀則・岩田靖編. 体育科教育法入門 三訂版. 大修館書店, pp.286-292.
- 17) 文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 保健体育編.
https://www.mext.go.jp/content/20210113-mxt_kyoiku_01-100002608_1.pdf (2021年3月30日閲覧).
- 18) 日本スポーツ振興センター学校安全部 (2021) 学校の管理下の災害 [令和2年版].
<https://www.jpnsport.go.jp/anzen/kankobutuichiran/tabid/1961/Default.aspx> (2021年3月30日閲覧).
- 19) 西野明・七澤朱音・下永田修二・杉山英人・小宮山伴与志・佐藤道雄 (2017) 学校現場における「よい体育授業」に関する検討. 千葉大学教育学部研究紀要, 66(1) : 125-127.
- 20) 岡沢祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎 (1996) 運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究. スポーツ教育学研究, 16(2) : 145-155.
- 21) 佐藤裕・西村清巳 (1978) 教育実習生の授業技術の変容過程と指導観の変容態様についての研究. 体育学研究, 23(2) : 121-128.
- 22) スポーツ庁 (2018) 子供の運動習慣における課題とは：「二極化」の改善に取り組む「体育」の優良事例をレポート！. <https://sports.go.jp/special/case/childrens-habit-of-physical-activity.html> (2021年5月15日閲覧).
- 23) 住本純 (2016) 小学校教員養成段階における体育授業観の様態：短期大学児童教育学科を事例に. 夙川学院短期大学研究紀要, 43 : 18-26.

- 24) 須甲理生・助友裕子 (2017) 保健体育科教職志望学生における保健体育教師イメージの変容：模擬授業とその省察を中核に展開した教科教育法の前後に着目して. 日本女子体育大学紀要, 47 : 49-63.
- 25) 高橋健夫 (2010) よい体育授業の条件. 高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖編. 新版 体育科教育法入門. 大修館書店, pp.48-53.
- 26) 米村耕平・平野智之・高橋健夫 (2003) 体育授業の雰囲気を観察する. 高橋健夫編, 体育授業を観察評価する：授業改善のためのオーセンティック・アセスメント. 明和出版, pp.45-48.
- 27) 米村耕平・福ヶ迫善彦・高橋健夫 (2004) 小学校体育授業における「授業の雰囲気」と形成的授業評価との関係についての検討. 体育学研究, 49(3) : 231-243.
- 28) 吉崎静夫 (1997) デザイナーとしての教師 アクターとしての教師. 金子書房, pp.34-50.